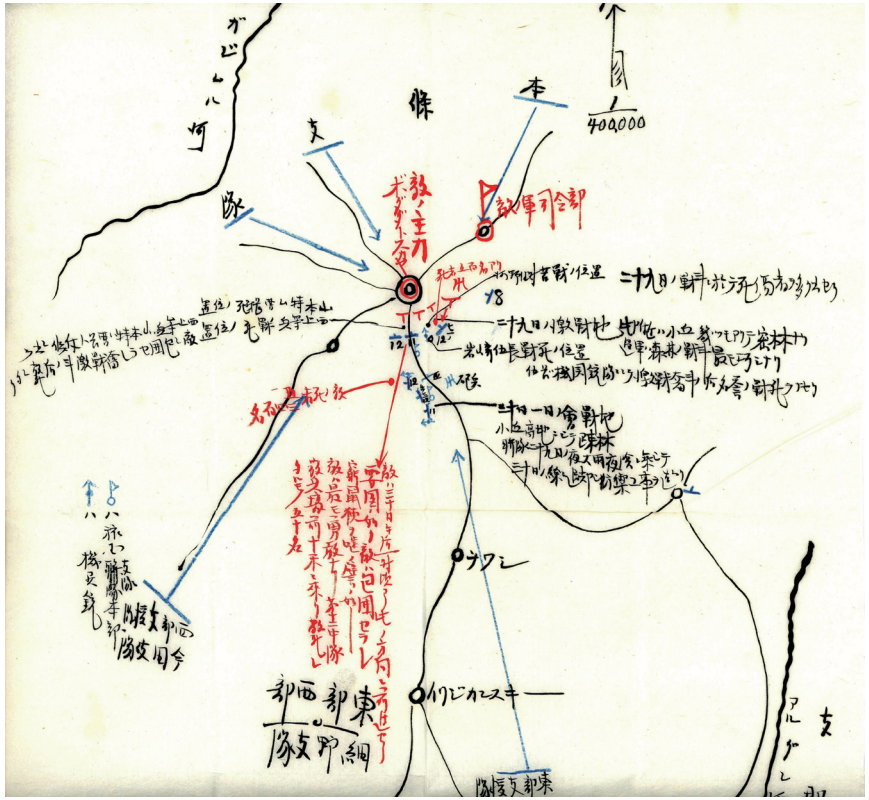
5-1-2　ロシア革命

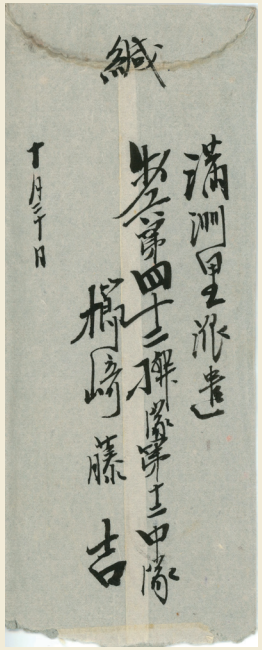
シベリア出兵



＊津田家文書（宇部市）25「櫛﨑藤吉書簡」

解　説

第一次世界大戦の末期にロシアで革命が起こり，激しい内乱状態に陥りました。こうした情勢の急変に対し，日本国内ではシベリアに出兵して，北満州からシベリアにかけて勢力拡大を図ろうとする意見が次第に強くなり，1918（大正7）年に仏・英・米等の連合国との共同軍事行動にふみきります（シベリア出兵）。ところが共同出兵した連合国内部の足並はそろわず，革命・反革命勢力の抗争も錯綜・激化したため，参加国は次々に離脱していきます。その結果，1920（大正9）年1月以降は日本の単独出兵という形となり，1922（大正11）年10月に撤退するまで，10億円もの戦費を費やし，3000人の戦死者と2万人以上の負傷者を出すという大きな犠牲を払った戦争が継続されました。



写真は，シベリアに出兵した陸軍歩兵第四十二連隊の櫛☒藤吉が，1919（大正8）年9月26日～10月1日にバクダットスカヤ付近に集結した過激派軍（革命軍）に勝利した戦いの様子を日本に知らせた手紙です。一緒に綴じてあった図には，部隊の経路，戦闘の結果，主要地点間の距離などが示してあります。また，手紙には，「弾丸雨霰ノ如ク身辺ニ落下致シ候フ共，不思議ニ命長ラヱ」たとの激しい戦闘の様子や，「目下当地ノ気候ハ御地ノ厳寒ニ等シク夜間ハ零下十二度ヲ示シ，昼間ハ北風ト共ニ雪花ヲ散シヲリ候」という厳しい気候などが記されています。

＊当館の田中義一文書にも，シベリア出兵に関する文書がまとまって含まれています。

山口県文書館所蔵アーカイブズガイド学校教育編
目次に戻る